

あのロボットを作った人に会いたい!

第2回 PBDRのスレンダーボディに詰め込まれた秘密

みなさんこんにちは、千葉工業大学未来ロボット技術研究センター (fuRo) の研究員の瀬戸文美 (せと・ふみ) です。シリーズ第2回目に会いに行った『あのロボット』は、2005年の愛知万博でも大人気で国内外を飛び回り、2007年の『グッドデザイン賞』にも選ばれた社交ダンスロボット『PBDR (Partner Ballroom Dance Robot)』と、そのハードウェアの開発を担当された野村ユニソン株式会社開発・技術本部の酒井和久氏と小泉瑞生氏。PBDRとは浅からぬ仲の私、久しぶりの再会を楽しみしながら、長野県茅野市の野村ユニソン株式会社本社にお邪魔してきました。

瀬戸 文美

(千葉工業大学・未来ロボット技術研究センター (fuRo))

精密機械の製造業の会社が、なぜダンスロボ?

新宿から特急に揺られること2時間強、長野県のほぼ中央に位置する茅野市に野村ユニソン株式会社はあります。茅野駅からさらに車で5分ほど移動し、到着した野村ユニソン株式会社本社。さて早速PBDRに…、と思って本社の入口に入ったら、そこで待っていてくれました、PBDR。入口を入ってすぐのところにあるロビーに、野村ユニソンが開発した様々な機械部品や自社商品と一緒に、展示されています。しかし、FA機器や精密機械部品などの設計や加工が主な業務内容である野村ユニソン株式会社、同じ機械とはいえ、なぜ社交ダンスロボットの開発を行うことに?

「うちの会社で2000年に『10年先までのロードマップを作ろう』という話があり、そのときに協力してくれたのが東北大学の青葉技術会。私が入社したときから『ロボットを作りたい』という希望があったのもあり、ロボットで何か面白いことをやりたいと相談したら、ロボットの研究をされていた小菅先生(小菅一弘教授・東北大機械系)と引き合わせてもらったのがきっかけです」

と、酒井氏。実は酒井氏はPBDRの話が始まる前にも、茅野市で発掘されて国宝に指定された土偶『縄文のビーナス』を模したロボットを独自に開発していたそうです。そして小菅教授との出会いによって、入社してからの希望がさらに広がり、PBDRの実現へと進む大きなきっかけとなったのが、2005年に開催されることになった愛・地球博。その一部として行われる『プロトタイプロボット展』への出展の



本社入口に展示されているPBDR、そのポジションはまるで会社の受付嬢?



一緒に展示されていた、光造形で作られたPBDRのミニチュアモデル。サイズ以外は本物とほぼ同じスタイル。



一緒に展示されていたもう一人の受付嬢(?)である、『縄文のビーナス』ロボット。前方に人が立つとお辞儀して自己紹介を行う。